

# 『朝鮮軍記』について

呉 満

## 1. まえがき

朝鮮半島との関係を日本では一言で日朝（日韓）関係という。そして、この両国の関係を有史以来、2000年の日朝・日韓善隣友好関係なる用語で両国の関係を述べる歴史観がある。

他方、両国の関係を負の歴史観で捉え、文禄・慶長の役（韓国・朝鮮では一般に「壬辰倭乱・丁酉再乱」）1592（文禄元年）～1598（慶長3）という。

換言すれば、「壬辰倭乱・丁酉再乱」とは、豊臣秀吉が2度に亘り、朝鮮半島に企てた侵略戦争のことである。

本書の書名が『朝鮮軍記』となった経緯については後述するが、本書は明治37年3月2日（第6035号）から同年7月17日（第6170号）に至る134回に亘り「日出新聞」に連載された、邑井 一口演、木川忠一郎速記による新聞連載記事である。本書は単行本として出版された形跡はなく、ある購読者（赤澤林三郎）によって丁寧に四針に袋綴された状態で永らく眠っていたものを、楽人館（JR鶴橋駅高下に存する古書店〈店主星野信昌氏〉）に偶然筆者が立ち寄ったことで本書と縁を結んだものである。

当初、本書は店主の計らいでビニール袋に入れられ大切に保管されていた。関心と興味を抱いた筆者は一枚一枚を恐る恐る繙いてみると、当時の紙質もさることながら既に赤みがかって所々磨滅しており、紙質が粉となってボロボロと剥がれ落ち不鮮明になっていた。

入念に調べてみると、明治期の新聞記事であること、記事表記の記述は文語表記であること、句読点の表記が明白でないこと、会話調の箇所の始まりと終わりの部分の表記が不明確であることなど、現代日本語表記から判断すると、

種々に亘り難点の多い文章であることが判明した。

しかし、筆者の胸中を密かに騒がせたのは、表紙に筆で『朝鮮軍記』と書かれていたことと明治期後半に著された、京都という一地方紙の「日出新聞」で発表された記事であること、赤澤林三郎氏個人蔵で未公開、未公刊のまま 80 数年を経過したことにより、今、これを解き、活かさなければ永遠に陽の目を見ることはありえないだろうとの思いと、いわゆる「文禄・慶長の役」終結より約五百年経た段階で、読者層の中心をなしたであろう京都市民が「文禄・慶長の役」をいかなる視点で理解、考察していたかに関心をもったからである。

特に、当時日本では、日清・日露の大戦に勝利し、アジアの勇として勝利に酔いしれていた時期である。言うならば、明治人の朝鮮観はいかなるものであったのか。今日的意義はどうなのかを知りたいとの願望であった。「文禄・慶長の役」を観る視点は日本人側の視点であろうし、筆者のような韓国人側の視点もあってもよからうと思う。

この頃、偶然知り会った大学同窓の澤田久仁枝女史に事の次第を述べ、協力依頼を告げたところ、協力体制の快諾をえることができた。早速、当時の新聞「日出新聞」の前身と現「京都新聞」を調べるべく京都に出かけることにした。たしか 2010 年の 3 月の陽春うららかな日であったように想起する。

参考までに「京都新聞」小史（年表）と題額の変遷と主な出来事を列举すれば下記のごとくである。

#### 京都新聞小史（年表）と題額の変遷

- ◆明治 12 年（1879）～ 45 年（1912）
- ◆明治 12 年、15 年、18 年、30 年
- ◆大正元年（1912）～ 15 年（1926）
- ◆大正 4 年 10 年
- ◆昭和元年（1925）～ 64 年（1989）
- ◆昭和 4 年 17 年、26 年、26 年
- ◆平成元年（1989）～

◆平成7年（1995）～

[明治]

- |              |                           |
|--------------|---------------------------|
| 12年（1879）6月  | 「京都商事迅報」創刊。               |
| 8月           | 「商事迅報」に改題。                |
| 14年（1881）10月 | 「京都新聞」創刊。                 |
| 15年（1882）7月  | 京都新聞を「京都滋賀新報」と改題（関西で初めて）。 |
| 17年（1884）10月 | 京都滋賀新報を「中外電報」と改題          |
| 18年（1885）4月  | 中外電報の姉妹紙として「日出新聞」を発行。     |
| 22年（1889）4月  | 京都市制施行。                   |
| 25年（1892）9月  | 中外電報を廃刊、日出新聞にバトンタッチ。      |
| 27年（1894）7月  | 日清戦争起こる。                  |
| 28年（1895）2月  | 京都に日本最初の電車が走る。            |
| 30年（1897）7月  | 日出新聞を「京都日出新聞」と改題。         |
| 37年（1904）2月  | 日露戦争が起こる。                 |
| 45年（1912）2月  | 「京都夕刊新聞」創刊。               |

[大正]

- |             |                     |
|-------------|---------------------|
| 3年（1914）7月  | 第1次世界大戦が起こる。        |
| 5年（1916）5月  | 京都夕刊新聞を「関西日日新聞」と改題。 |
| 9年（1920）10月 | 関西日日新聞を「京都日日新聞」と改題。 |
| 12年（1923）9月 | 関東大震災が起こる。          |

[昭和]

- |             |                             |
|-------------|-----------------------------|
| 4年（1929）10月 | 世界恐慌が始まる。                   |
| 6年（1931）8月  | 神戸・大阪時事・京日3社が合併し3都合同新聞社が発足。 |

記述のとおり、本書は『朝鮮軍記』と題する、所謂、歴史通説物語の体裁を

取っている。だからと言って、歴史専門家による著書ではないが、近世日本史、とりわけ豊臣秀吉によって起こされた日・中・朝<sup>せつけん</sup>を席卷した、軍事上、外交上における稀有の重大事件であり、三国双方を巻き込み、善隣友好関係を破壊した国際戦争であった。そして現在もなおこの戦争の顛末については各分野からの歴史分析が行われ結論を見出し得ていない懸案事項である。よって、筆者のような者にも関心を抱かせて飽きない。

したがって、我々はこの戦いの発端が足輕から身を起こし、一代にしてほぼ日本国の天下統一を成し遂げた豊臣秀吉個人の野望による単なる侵略戦争というのみで決着される問題ではない。そこで、いまいし豊臣秀吉個人の人物について概観してみようと思う。

笠谷和比古・黒田慶一共著（『秀吉の野望と誤算一文禄・慶長の役と関ヶ原合戦』、文英堂、2000年6月刊）によると、豊臣秀吉（1537〈天文6〉～1598〈慶長3〉）は、1537年2月6日に尾張国愛知郡中村（現名古屋市中村区）に生まれた。父弥右衛門は織田信秀の足輕であったが、負傷して村に帰農したという。秀吉の母、なか<sup>ごきそ</sup>は御器所村の出身で弥右衛門との間に姉とも、秀吉、秀長、妹あさひを出産した。後、1543に実父弥右衛門が死去し、母は織田家の同胞であった竹（筑）阿弥に再嫁した。

秀吉の幼名は不明で、世に喧伝されている「猿」や日吉丸は江戸時代の創作であるらしい。史料によると、義父と折り合いが悪く、光明寺に入れられたり、10歳から職を転々とし、15歳の時に父の遺産永禄銭1貫文で木綿針を買い、今川領に行き、矢作橋<sup>やはぎ</sup>で蜂須賀小六<sup>はちすか ころく</sup>に出あったと言われるが、この有名な話も殆ど物語だという。ただこの後に浜松の久能城主松下加兵衛に仕えたのは事実らしく、後年、天下人となってから松下之綱<sup>ゆきつな</sup>を厚遇している。

天文23年に尾張に帰り、この頃、織田信長に小者として仕えたと推定されているが、詳細は不明である。因みに、草履で懷を暖めたという逸話から清州城割普請・台所奉行・薪奉行・長短槍試合、そして墨一夜城築城までの有名な逸話も全て創作であるらしい。

僅かな真実は、永禄4年（1581）8月3日に正室「おね」と結婚したこと、同8年11月2日に信長が美濃国松倉城<sup>みの</sup>の坪内利定に与えた知行状の添状を秀

吉が出していることである。これが「木下藤吉郎秀吉」の著名のある文書の初見である。

次に秀吉の名が確実な史料に記されるのは『信長公記』の同11年9月12日の条の、秀吉が近江箕作城攻撃に戦功をあげていることである。翌12年（1570）4月に明智光秀と共に京都奉行を務め、この頃から発給文書も増加していき信憑性が増す。

元亀元年（1570）4月28日には越後に侵攻した織田軍の全軍撤退の殿軍を務め、藤吉郎の‘金ヶ崎退き口’<sup>かぬがさきのみぐち</sup>と称えられ、武将としての名声をあげるようになった。

同年6月28日の姉川合戦以降の秀吉は横山城の城番を命ぜられ、天正元年（1573）9月1日の小谷落城・浅井長政自刃まで、対浅井氏への戦略を一手に引き受けている。湖北領有後は、城を今浜に移し、城下町を造成し、新造の城と城下町が永遠に発展するよう‘長浜’<sup>ながはま</sup>と改名し、本能寺の変まで7年間在城する。長浜城時代の秀吉は、その殆どの期間を信長の天下統一への先兵として出陣する。しかし、その合間を縫って領内を巡見し、算勘の才のある者や武術に秀でた者たちを見出し、家臣としていった。即ち「近江衆」の形成である。

秀吉は天正5年10月、信長より中国経略を命じられ、播磨に出陣して以降、但馬・因幡・美作・伯耆を平定し、備中の高松城で中国の勇である戦国大名毛利氏と対峙した。

天正10年6月、本能寺の変で信長が倒れると、急遽毛利氏と講和を結び反転し、明智光秀を山城山崎で攻撃し、信長の後継者として名乗りを上げた。そして、天正11年賤ヶ岳の合戦で柴田勝家を破り大坂城を築城し本拠とした。同12年の小牧の役では局地戦である長久手合戦で徳川家康に敗れるが、戦略で家康を圧倒し、講和を結び、その後、臣従させた。同13年、従一位関白となり、四国を平定し、北国から越中、越後に、飛騨から信濃に勢力を伸ばし、同15年、九州を平定する。

天正16年4月、聚楽第に御陽成天皇を迎え、大名から起請文を取って政権基盤を固めた。同年7月、秀吉は刀狩令と海賊取締令を出し、関白を頂点とする天下統一を加速していった。天正18年、小田原の陣で北条氏を降し、



秀吉の天下統一がほぼ完成した。

秀吉の大陸侵攻構想は関白就任時からあり、文禄元年（1592）に諸大名に命じて、朝鮮出兵を実行した（文禄の役）。日本軍は緒戦で朝鮮国の二王子（臨海君・順和君）を捕え、明国の国境まで侵攻したが、義軍の蜂起と明軍の介入により戦線は膠着状態となり講和が結ばれた。和議により兵は帰国したが、慶長元年（1598）、明使が秀吉に呈した「封爾<sup>なんじ</sup>日本国王」の国書に怒り再度の朝鮮出兵を命じた（慶長の役）。

同年2月1日、小西行長、加藤清正を先鋒とする日本軍が再度渡海した。諸軍は朝鮮半島南部の沿岸地帯を確保しているうち、慶長3年（1598）18日、秀吉が伏見城で死去し（齢62歳）、全軍が撤退した。

秀吉の辞世は「露と落ち、露と消えにし 我が身かな 浪速のことも 夢のまた夢」である。

慶長4年4月、洛東、東山の阿弥陀ヶ峰西麓（京都市東山区）に造営された廟所に葬られ、豊国社が造られた。朝廷は秀吉に豊国大明神の神号を贈った。

## 2. 秀吉の大陸征服の野望

本稿を執筆するさ中、2011年3月11日、未曾有の東北大震災が勃発し、日本列島に甚大な被害を与えた。特に、原発の爆発は世界の注目するところとなり、大阪に居住する筆者にも精神的苦痛と打撃を与え、連日、新聞とテレビの報道から目が離せなくなった。特に、いずれ起こるであろうと想定されている東海、南海、東南海地震の連鎖反応の恐怖に苛むることになった。

この度の未曾有の東北大震災は日本の国力、なかなずく、政治力、経済力、それに日本国民の英知によって復旧、復興されよう。しかし、16世紀の豊臣秀吉によって起こされた野望と誤算は朝鮮民族にとって不惧載天の一大事件として忘れることのできない歴史事件であった。骨を韓国で、血を日本で育まれた筆者にとっても、過去のこととは言え、無念さは同じである。

韓国では、未だに、親が幼児をあやす時に、<sup>ブンシンスギル</sup>「豊臣秀吉が来るよ」と言えば、幼児が泣き止む、と聞いたことがある。まさに秀吉のしでかした大陸侵攻の野

望は「無名<sup>むみょう すいし</sup>の出師」（大義名分の無い出兵）であり、朝鮮国の人民と日本国民に甚大な殺戮をもたらした稀有の戦であった。今日に至るまで、日・朝・中、三国に亘りわだかまりの原因をもたらしたという点で我々は反省的に捉えなければならない。

一方、この戦争の教訓を生かし、徳川政権に友好の通信使が派遣され、200年に亘る両国の善隣友好が実現されたことも銘記されねばならない。

他方、秀吉は天下統一の方策として朝廷官位と天皇権威による支配というありかたを前面に持ち出した。秀吉の官位昇進は異常な早さを見せ、小牧の戦いが終わった直後の天正12（1584）年の10月には叙爵し、翌11月に従三位権大納言に叙任され公卿に列している。さらに翌天正13年3月には正二位内大臣<sup>しょう</sup>という血統上の由緒を持たない出自の者としては破格の高位の身分として昇進することになる。さらに遂に同年7月に従一位へ昇叙し関白に任ぜられ、翌天正14年には太政大臣も兼ね、併せて豊臣の姓を朝廷から与えられ秀吉と朝廷・公家社会との協調関係は順調に発展していった。

そうして秀吉の天下統一戦略も、宿敵徳川家康の臣従化もこの路線の上で実現されていった。即ち天正14年10月に徳川家康を上洛させ自己に臣従させることに成功し、家康をして秀吉に臣下の礼を取らせることに成功した。実に関白という権威を背景に家康を軍事的に屈服させることができたのである。

秀吉の関白職（1585～1691）は、もとより公家の官職であり、公家社会における最高位を意味している。しかもこの関白職をもって武家領主と武家社会を統合する権威的地位を有することになった。かくして関白秀吉は武家領主としての兼備者として公武両界の支配を目指して政治体制を構築していった。

そして秀吉の全国統一戦争も関白職についての公武統合論の観点から進められ、全国各地での領土紛争を巡る私戦の禁止と秀吉の裁定への服従強制、そしてその違背者に対する制裁としての軍事討伐の形態をもって日本60余州の進止、即ち全国統一の権限が関白である自分に委任されていることを強調することになる。この目的のために武家領主を動員し、統率する権限を有することになった。

天正15年（1587）の薩摩（鹿児島県）の島津征伐も、同8年の小田原（神

奈川県）の北条征伐もこの強大な権力を背景に行われた。こうして薩摩の島津も小田原の北条も秀吉の上洛に従わず、その結果として秀吉の軍隊によって打倒され滅ぼされていった。

秀吉の無敵、不敗の軍隊は織田信長時代の鉄砲常備の兵農分離型の軍隊とその移動性を物質的に支える兵站・補給のシステムによって構築され、全国統一した余勢をかって、一気に大陸侵攻にまで夢見たとしても虚妄とは言い切れない背景があった。これは、その後の強さと脆さの中で、文禄・慶長の役とその顛末の中で如実に示されていくことになる。

### 3. 秀吉の野望な大陸征服構想

秀吉が国内平定後に大陸に出兵し、明（中国）・朝鮮を征服せんとする構想を考え出したのは、ポルトガルのイエズス会宣教師のルイス・フロイスの報告書『日本史』によると、信長は日本統一を目論んだ後、大艦隊を編成して中国大陸を征服することを視野に入れたという。このように秀吉の大陸に対する態度も信長の構想を引き継ぐ形で次第に危険な大陸征服の野望へと膨張していった。

秀吉の大陸征服の構想を述べた史料がある。文禄の役の際戦の勝利で朝鮮の首都、漢城（現、ソウル）が陥落した文禄元年（1592）5月、秀吉の甥の関白秀次<sup>ひだつぐ</sup>に対して25ヶ条の朱印状を示した。この朱印状というのは、日本・朝鮮・中国に亘る国割の計画が描かれていた。世にいう「豊太閤三国処置太早計」と言われるものである。内容は、時の御陽成天皇を中国の北京に移し関白職に秀次を就け、日本の帝位は若宮王子<sup>わかみや</sup>（良仁親王<sup>よしひと</sup>）か八条宮（皇弟・智仁親王<sup>ともひと</sup>）に継がせ、その羽柴関白には秀保（秀次の弟）か宇喜多秀家<sup>うきだ ひでいえ</sup>（岡山城主、後の五大老の1人）を宛てる、というものであった。また、朝鮮には羽柴秀勝（信長の四男、秀吉の養子）を置き、京都の聚楽第の留守居は未定であるが、当時の奉行衆の増田長盛・大谷芳継・石田三成らに任せるほか、朝鮮の首都、漢城や名護屋などにも留守居を置くようにしていた。また、皇室・公家領として中国の都廻り10カ国、大唐関白（秀次）領として同じく100ヶ国を宛てる。



秀吉自身は暫く北京に留まった後、日朝交通の要衝である寧波府（中国上海南方の港町）に移り、中国を中心とした占領政策を、やがてはインドまでも含んだ大構想に発展させるというものであった。

結局、この机上の大構想は秀吉の思惑通りには進展しなかった。それは秀吉水軍の不振、朝鮮への圧倒的な明の援軍と朝鮮民衆の義兵闘争などで秀吉の大陸征服の構想は結果的に朝鮮一国を侵犯するのみに止まり失敗に帰したが、その後の日朝・日韓間に深い傷跡を残すことになったのは周知の事実である。

ところで、秀吉は、なぜ、このような大陸征服を仕掛けたのであろうか。一体、秀吉の国際感覚はどうであったのかが問われる。当時の文献史料を明示しないが、既に天正15年（1597）、即ち九州平定完了後、妻の北政所への私信と対馬の宗氏への命により、秀吉は当時の朝鮮国を日本国内の大名領土と同じ程度に考えていたようだ。それ程に秀吉の国際感覚のなさを笑う歴史家は多い。

日本を朝鮮より優位とする考えは秀吉以前の日朝貿易に従事する守護大名の大内義隆や環30海地域での勘合貿易に代表される正式な国家間の交流と国際的人的交流のネットワークの中で秀吉の国際感覚も鋭く研ぎすまされていったと思われる。このことは当時の西洋諸国がアジアを植民地化しつつあることもまた側近からも得ていたであろう。

筆者はこの分野の国際関係史が専門ではないので詳細に分析できる知識に欠けるので言及は避けるが、明の討伐を目標とした秀吉の大陸征服構想には国の統一を成し遂げた自信と勢い、長崎での南蛮貿易を通しての豊かな情報網から裏打ちされた国際感覚が鋭かったことは否定しがたい。

#### 4. 李氏朝鮮の状況と対応

李氏朝鮮は、1392年に倭寇討伐に苦心した李成桂が建国し、秀吉の頃には200年近くの歳月が平和裏に流れ軽武崇久、即ち武官を軽視し、文官を尊ぶ傾向にあった。国政においては両班（文班・武班）階級が国王の下で政務が執り行われ、完全な文民統制の下に置かれていた。国政は明（中国）皇帝から朝鮮国王であることを認知され「冊封」を受け明皇帝に臣属し、朝貢を行うこと

を基本とする冊封体制で旧来の友好と国境を維持し、平和を是とする真に硬直した儒教支配体制であった。実に慕華思想と事大思想にあった。

当時、朝鮮は唯心論と唯物論という哲学上の論争が政治的な党派の別となって現れ、学問上の正統と異端や儀礼の細目についてまで際限なく議論を繰り返す文字どおりの繁文縟礼じょくれいの世界が朝鮮朝廷の姿であった。そして高級官僚たちは東人党と西人党の2つに分かれ激しい権力闘争に明け暮れていた。

「文禄の役」の朝鮮通信使（1590、3～1591、3）の折も正使黄允吉は西人党、副司令の金誠一は東人党に属し、日本攻撃のあることを報告した黄允吉に対し、金誠一は真っ向から反対の意見を述べ、朝鮮朝廷の戦争への対応を遅らせる一因となった。この間の過程と記録には『懲愆録』（柳成龍著、1598刊、東洋文庫）に詳述されている。

## 5. 文禄の役における秀吉軍の構成

これについては、従来、諸説があり定かではなかったが、笠谷和比古・黒田慶一共著では早計 18 万 7100 と動員数が詳報されている。ところが、最近（2007 年 7 月、「沙也可の会」主催での講演会発表（尹達世氏）によると、“天正 20 年（文禄元年・1592）、豊臣秀吉が中国大陆の制覇を企図し、約 30 万の軍兵を動員し、その内、約 15 万の軍兵を渡海させ、朝鮮半島を経由して明国を侵略しようとした戦争”と規定している。先の笠谷和比古・黒田慶一共著では“徳川家康・前田利家・伊達政宗・上杉景勝と言った東国、北陸地方の諸大名は、この渡海軍には加わらないが、その兵十万余と共に後詰めとして名護屋に在陣した”（同書 P.40）とあるから、動員数の構成人にズレがあるといえよう。

いずれにせよ、当時の日本国内の状況から判断し、総計 197,100 人の秀吉兵の動員数は異常であると言えよう。これに加えて、軍事物資の海外輸送の任に従事した者、大工、石工などの技術者などを合わせると、約 30 万の出兵及び動員数は頷ける数と言えよう。

1 番隊の小西隊は 4 月 27 日には朝鮮半島の中部の要衝である忠州を陥れ、

首都漢城に迫り、朝鮮国王李<sup>イウン</sup>は漢城を脱し平壤に向かい、さらに鴨緑江方面に逃れ明国に援軍を求め、それに呼応して明国は三將戴朝弁、副総兵祖承訓らを長とする兵 5000 余を急遽救援軍として派遣したが、小西軍の部隊の反撃に遭い大敗を喫した。平壤の秀吉軍の予想外の強力を知った明国では沈惟敬を代表に立てて秀吉軍に講和を提案し、同年 9 月 29 日、小西行長との間に 50 日の休戦が締結された。漢城攻めの手柄を競い合っていた小西行長と加藤清正は小西主導の和平工作に従うなど、思いもよらぬことであった。

こうして朝鮮の咸鏡北道から満州のオランケへと軍を進めた清正は朝鮮軍への攻撃を緩めず、この地に避難していた朝鮮国王の王子 2 人を捉えて捕虜としたのである。朝鮮国としては実に屈辱であったろう。

## 6. あとがき

ところで、筆者は、2011 年 3 月を期して本学を一旦、定年退職することになった。そこで、これまでの経歴業績目録を提出されたいとのことである。そこで昨春以来、暖めていた本稿『朝鮮軍記』を提出すべく準備していたが、A 4 サイズ 400 頁は単独では無理だとのことで、内容を変更しプロローグ的な記述になった。近日中に適当な出版社から単行本として世に問うことにしたい。

在日コリアンとしてこの世に生を享けこの方、日朝・日韓問題に鋭意関心を抱き、それなりに考察してきたが、問題を考察する過程で愉快になったことは一度もない。悔しさともどかしさ、憤怒とやるせなさの連続であった。

筆者本来の専攻分野は韓国学と言語学である。この分野の論文も数編、世に問うてきたが、考察すればするほど袋小路に嵌まってしまい、釈然としないままになってしまった。僭越ながらこの期に臨み回顧するに、もっと身を削って研究に勤しんでおくべきだったと反省している。

しかし、偶々、筆者が入手した本書は記述のごとく、明治後半期、日清・日露の大戦を経た時点での新聞に掲載された、おそらく比較的読者層を迎えたとの観測もあって、浅学を顧りみず、理解しやすくと心の構えで文語調を現代日本語に編集し直し読者に提供したつもりである。本書の作業は、前書きにも触

れたように、大学の後輩の澤田久仁枝女史の献身的な協力、協助がなければ実現していなかったであろうと思う。深甚の感謝を述べたい。

今、振り返ると野望な挑戦をしてしまったと少し反省している。その1つは地名と人名と歴史的用語に詳しい注釈を附したかったがままならなかった。内容の記述は難解で苦心したが、これでも当初の原文を離れ、かなり理解しやすく編集し直したつもりである。したがって、記述は既に速記者の手を離れた感が否めないの、筆者の編訳とした。読者の寛大な理解を求めたい。

想い起せば、高校時代の日本史の授業で、担当教諭は秀吉の大陸侵攻については何故か素通りしてしまい、教材プリントを数10枚配布し、後は各自が学習するようにとのことであった。これは、何かあるぞ、と永い間の筆者の宿題になってしまった。今でこそ秀吉の朝鮮征伐とは言わないが、‘征伐とは、悪者を武力で懲らしめる’との意味である。私は目を真っ赤にして恥ずかしさで頭を上げられなかった辛い体験をしたことが思い出される。関白豊臣秀吉は正義で、侵略された朝鮮は悪であったのか。秀吉の「文禄、慶長の役」（韓国で謂う「壬辰・丁酉倭乱」）の検証は未だに懸案事項であり、歴史家の研究課題でもあり、傷はいまだに癒えていない。

秀吉が大陸侵攻などと野望を抱かず日本国内の平和統一に尽力し、日本と朝鮮半島の友好と親善に邁進していたならば…。1950年に勃発した、北の南進で始まる、同族、惨死の「朝鮮戦争」がなかったならば…。恐らく朝鮮半島が南北に分断されることはなかったであろう…。歴史の隘路をいくら叫んでも今になっては‘<sup>あと</sup>後の祭り’である。

この2つの、東アジアを席卷した戦争はこれからどのような解決の糸口を見出すのであろうか。人は歴史に生き、歴史に翻弄される。半島の人々の鬱積した心理と中国本土以上に儒教体制に偏った排他的な政治と優越心の入り混じった、複雑で手に負えない精神状況を醸し出し今日に至っている。

ところで筆者は、以前から雨森芳洲<sup>あめのもりほうしゅう</sup>についての考察に鋭意、心を注ぎ、その成果を世に問うてもきた。語学的には『交隣須知』の語彙的分析を、対朝鮮外交に関しては『交隣提醒』を考察した。後者は対朝鮮外交の指針であり、芳洲の代表的著作の1つで、原本は18世紀の日本における重要文化財として指定



されている。『交隣提醒』の最終章の54章には有名な記述がある。それを現代文に訳すれば、次の通りである。

“多くの人々が誠信で交流するというが、この言葉の意味を明白に分かっていない場合が多い。誠信というのは、実意という意味を持っており、互いに「不欺不爭」（欺かず、争わず）、真実を持って交際することを誠実というのである”（大阪経済法科大学論集、第94号、2008年3月、参照）。永年、対朝鮮外交に携わり苦心した芳洲にして言わしめた外交の指針である。

日韓関係は一衣帯水であり、唇齒の関係を謂われてきた。向後、いかなる艱難があろうとも「不欺不爭」の精神と理念でもって東北アジアの共同圏構築に向けて平和と繁栄に努めなければならない。

今日の日・韓（朝）・中の社会状況を見ると、いずれも事件と異なるものの寛容性が欠如し、外に対して排他的な姿勢が強く見られる。三国の一層の国際化を図り、共生・共存社会の構築を実現していくべきである、と思う。

最近特に、筆者が危惧するのは、2010年6月21日、大阪日日新聞が〔ソウル共同〕で報じた記事である。それによると、韓国気象庁が中国と北朝鮮の国境に位置する白頭山（中国名長白山、2750 m）が数年以内に噴火する可能性を示唆したことである。韓国政府は本格的な災害対策を進める方針を明らかにしたとの韓国メディアを同年一斉に報じた、因みに、白頭山は10世紀に大噴火を起こし、火山灰は日本の北海道から東北地方にまで到達したとされている。近未来、万一噴火すれば朝鮮半島はもとより、日本にも想像を絶する大災害をもたらすであろう。韓国の地球科学の専門家は最近、韓国気象庁主催のセミナーで、中国の研究者は14～15年以内に噴火する可能性があるとのことである。

韓国の聯合ニュースなどによると、白頭山周辺は2006年6月以降、地震の頻度が従来の約10倍に増加し、頂上にあるカルデラ湖「天池」の地形が少しずつ盛り上がっていることが衛星写真で確認されたほか、近くの森林地帯から火山ガスが放出されている、とのことである。被害を最小限に抑えるため、白頭山に観測機器を設置し、噴火の時期や規模を予測する研究を急ぐ必要があると警告しているという。南北朝鮮はもとより、中国・日本との共同研究や協



力体制が必要であろう。

果たして人類は地殻の大変動を抑止し防ぐことができるのであろうか。近未来、東アジア、とりわけ朝鮮半島と日本列島は文字どおり未曾有の天変地異に遭遇するのであろうか。

日本の諺に、「袖<sup>そで</sup>触れ合うも多<sup>た</sup>生<sup>しょう</sup>の縁」という。これまでの永きに亘りご交誼いただいた諸兄、諸姉に万感の感謝の意を込めて惜別の辞としたい。

（2011年7月1日吉日、記）